



渋谷区立松濤美術館 開館40周年記念

白井晟一 入門

This is Sirai Seiichi

第1部 白井晟一クロニクル 2021年10月23日(土)～12月12日(日)

第2部 Back to 1981 建物公開 2022年1月4日(火)～1月30日(日)

※会期中、一部展示替えがあります

1. 《懷霄館（親和銀行電算事務センター）》1973～75年 撮影：柿沼守利

本展の見どころ

- 1 白井晟一の晩年の代表作、松濤美術館が会場となります。
- 2 謎に包まれたその人物像を、文化人ネットワークの視座から読み解きます。
- 3 全国にいまなお残る白井建築。その現在の生き様についてご紹介します。
- 4 1981年、開館当時の松濤美術館へ。白井が目指した理想の空間を体験します。

展覧会概要

白井晟一（1905～83）は京都で生まれ、京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）図案科卒業後、ドイツで哲学を学ぶなど異色の経歴をもつ建築家です。林芙美子などと交流した滞欧期を経て帰国後、義兄の画家・近藤浩一路の自邸の設計を手がけたことを契機に独

学で建築家への道に進みました。その後「^{かん}飲^き歸^き荘」「秋ノ宮村役場」といった初期の木造の個人住宅・公共建築から、「親和銀行本店」「ノアビル」「渋谷区立松濤美術館」など後期の記念碑的建築まで、多くの記憶に残る作品を残しました。そのユニークなスタイルから哲学の建築家などとも評されてきました。

一方で、建築以外の分野でも才能を発揮し、多くの装丁デザインを手がけ、そのなかには「中公新書」の書籍装丁など現在まで使用されているものもあります。また著作や、書家としての活動など、建築の枠組みを超え、形や空間に対する思索を続けました。

本展は、初期から晩年までの白井建築や、その多彩な活動の全体像にふれる、いわば白井晟一入門編として構成するものです。

第1部では白井晟一の設計した展示室でオリジナル図面、建築模型、装丁デザイン画、書などの展示を中心に白井の活動をたどります。

第2部では外ならぬ晩年の代表的建築のひとつである松濤美術館について、ふだん展示向けに壁面等が設置されている展示室を、白井がイメージした当初の姿に近づけ公開します。また、白井が蒐集し愛用した調度や美術品を会場に配置し、インスタレーションとして再構成します。



2.「白井晟一ポートレート」白井晟一研究所

展覧会構成

第1部 白井晟一クロニクル

2021年10月23日(土)～12月12日(日)

※会期中、一部展示替えがあります

序章：建築家となるまで

京都生まれの少年は、京都高等工芸学校図案科に学び、哲学に惹かれてヨーロッパに渡り、さまざまな人々と出会う。

1928年、白井は京都学派の美学者・深田^{やすかず}康算との交流から哲学を志し、ハイデルベルク大学の門戸を叩きます。同校では哲学に加え、美術史や神学を学び、休みの時期にはパリやモスクワなどヨーロッパ各地に出かけ、古い町並みや寺院を見て回りました。この体験は後の建築家としての活動において結実します。

3. 「ドイツ留学時代の白井晟一」
1928～32年頃 白井晟一研究所



第1章：戦前期 滞欧をへて独学で建築家へ

日本への帰国後、義兄の画家・近藤浩一路の家の設計に助言するうちに、独学で建築家への道を歩みだす。その後文化人たちから依頼が舞い込む。

白井が初めて設計にたずさわった義兄の家には暖炉がありました。一見すると西洋風ですが、中央には東アジア建築に見られる火灯窓の形があらわれています。当時は幾何学性を重んじるモダニズム建築の隆盛期。しかし白井の建築は、その出発の時点からモダニズムとは違う可能性を秘めていました。



4. 《嶋中山荘（夕顔の家）》1941年 白井晟一研究所
*中央公論社社長の嶋中雄作の山荘



5. 《河村邸（旧近藤浩一路邸）》
1935～36年 白井晟一研究所

第2章：1950～60年代 人々のただなかで空間をつくる

戦後社会の要求のなかでローコスト住宅から、公共建築、商業建築まで幅広い仕事をこなす。秋田、群馬など地域の要請に応える建築も手がけ、次第に建築家としての存在感を増していく。一方で、建築の在りかたを問う「伝統論争」の重要な論客とみなされる。

秋田県湯沢市には、50年代前半の白井作品がいまなお集中して残っています。村の民家から着想を得たというこの役場は、白井晟一にとって初の公共建築。この後に設計された《^{まつい だまちやく ば}松井田町役場》《^{お がちまちやく}雄勝町役

場》《^{ぜんしやう じ ほんどう}善照寺本堂》など公共的作品によって、白井は1961年、建築家として初めて高村光太郎賞を受賞し、一躍注目されます。「民衆」や「民族」の建築家と呼ばれた、この時期の白井を代表する力作です。



6. 《秋ノ宮村役場》1950～51年
撮影：間世潜 協力：はこだてフォトアーカイブス



7. 《渡辺博士邸（試作小住宅）》1953年
撮影：平山忠治

群馬県前橋市で現在も営業を続ける書店、「^{かん こんどう}煥乎堂」の旧店舗。

施主であり社長であった高橋元吉は優れた詩人であり、彼のもとには数々の芸術家が集います。白井晟一はその1人でした。煥乎堂もまた、単なる書店ではなく文学と美術を通した文化的サロンの役割を担いました。



8. 《煥乎堂》1953～54年 撮影：間世潜
協力：はこだてフォトアーカイブス

第3章：1960～70年代 人の在る空間の深化

自邸は建築の実験の場。増改築を続けた《滴々居》、光と闇の《虚白庵》。聖堂など祈りの空間にもとりくむ。

1963年頃まで暮らした自邸《滴々居》^{てきてききよ}は、遂に未完成のままでした。雨が降ると、こけら板を簡単に並べた屋根から、部屋の中まで水が滴り落ちました。自分たち家族の暮らしにとって、住居とはどうあるべきか。生活のなかで建物を創り上げるための、実験の場でした。一方、後年を過ごした《虚白庵》^{こはくあん}は分厚いコンクリートの壁で囲まれ、近隣住民からは「核シェルター」とまで呼ばれていた住宅でした。内部に豊かな暗闇を抱く、思索と沈静の空間です。



9. 《滴々居》1951年～

祈りの空間

この時期、《サンタ・キアラ館》のようなチャペルにとどまらず、白井の建築には独特の宗教性が感じられるようになります。それらは、銀行や住宅など、本来は祈りを捧げるための場ではないところにも明確に現れました。熱心なキリスト教信者であった頭取、北村徳太郎の依頼によって実現した一連の「親和銀行」の建築はその代表格で、白井建築の一つの極致を見ることができます。



10. 「虚白庵の白井晟一」1970年頃
画像提供：株式会社芸術生活社



11. 《親和銀行東京支店》1962～63年頃



12. 《サンタ・キアラ館》茨城キリスト教大学チャペル 1973～74年

終章：1970～80年代 永続する空間をもとめて

塔や美術館など、記念碑的な建築を手がけた最晩年。

一方で、静謐な日本家屋の住宅などにも理想は結晶化されていく。



【参考】13.《ノアビル》 1/50模型
制作年：2013年 監修：岡崎乾二郎
制作：上村卓大（元武蔵野美術大学彫刻学科
研究室助手）ほか 撮影：加藤健

二つの美術館

松濤美術館と芹沢銈介美術館は、ともに1980年代初頭に建てられた晩年の代表作。自ら韓国に赴いて見出した材料、「紅雲石^{こううんせき}」の荒々しい石積みや、中央に抱く水源などが共通しています。

永遠にあり続ける石と、絶えず生まれ続ける水。白井晟一の美術館を構成する二大要素です。



14.《石水館（静岡市立芹沢銈介美術館）》
1979～81年 撮影：古館克明

アンビルトの未来建築計画

遺された未完の夢、設計図。

本作の設計が始まった1954年、ビキニ環礁でアメリカの水爆実験が行われ、日本の漁船、第五福竜丸が被爆する事件が起きました。これによって国民は戦後ふたたび、原子力の危険性と直面することになります。

本作は当初、丸木位里・俊夫妻の《原爆の図》を収める展示施設を想定していましたが、未完の計画となります。しかし、計画案であるがゆえの自由で力強い構想力と、白井晟一研究所の所員・大村健策による精密なスケッチは、戦後建築界に強烈な印象を残しました。



15.《原爆堂》建築パース 1955年 白井晟一研究所

書と装丁

建築家ではない、もう一つの側面。

白井晟一はそのキャリアを通して「文字」の形にこだわり続けました。図面に書かれた文字は美しくレタリングされ、ラテン語のカリグラフィーは《懷霄館》（親和銀行電算事務センター）など、実際の建築作品にも刻まれています。また、50歳を過ぎたあたりから白井晟一は「書」を日課とし、日が暮れてから夜明けまで、一日何十枚と書いたことが知られています。その一方で、文字を纏め収めるための「装丁」も白井晟一にとって大きな関心事でした。代表といえるのは、戦前からの嶋中雄作との関係を発端とする中央公論社の仕事。今なお使用されているデザインも多くあります。本展では白井の原画を中心に、初期から晩年までの装丁についてもご紹介します。

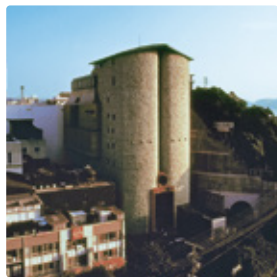


16. 《掃塵》^{そうじん} 白井晟一研究所蔵 撮影：田中俊司



17. 《中央公論社 中公文庫装丁デザイン画》
白井晟一建築研究所（アトリエNo.5）

全国に残る白井建築



秋田県（《秋ノ宮村役場》、《四同舎》）、茨城県（茨城キリスト教大学《サンタ・キアラ館》、《サン・セバスチャン館》）、群馬県（《松井田町役場》）、長崎県（《親和銀行本店》、《親和銀行大波止支店》）などには、初期から後期までの白井の代表的な建築が残り、その地域や施設のシンボルとして人々に愛されています。白井建築の中には稲住温泉の離れのように宿泊可能なところや、《静岡市立芹沢銈介美術館》のように見学が可能なところもあり、白井の建築の空間が体感できます。

第2部 Back to 1981 建築公開

2022年1月4日(火)～1月30日(日)

渋谷区立松濤美術館 白井晟一が挑んだ「ふつう」じゃない美術館とは？

まず敷地が極端に狭くてパブリックなものを建てられるようなスケールではなかった。そのうえ住宅地の一隅だから制限の多い小規模の物しかつくることができない。(中略)そういうことからふつうの美術館がどこでもしているように、展示を主にしてデパートの展覧会場の二番煎じみたいなことを追わない、創意によった使い方のできる区民のための美術館を計画したわけです。いずれにせよ最初から区民のための美術教育には熱心な要望もあり、美術諸分野の実習室。デザイン教室。資料研究の図書室。映画室。そりゃみんなつくりたいさ。だが建築面積百五十坪、十米の高さ制限の小さなスケールの中で、その悉くを過不足なく実現するにはどうしたらいいか。

—1980年12月インタビュー（『白井晟一研究Ⅲ』南洋堂出版 1981年2月より）

建築鑑賞 美術館館内をめぐる



【参考】18.《渋谷区立松濤美術館》外観 写真：◎村井修
湾曲しながら中へ引き込む正面は空間を広くとる工夫。韓国から輸入された「紅雲石^{こううんせき}」は白井自身の命名による。右手にある、設計図にはない不思議な蛇口にも注目。



【参考】19.《渋谷区立松濤美術館》地下1階展示室
写真：◎村井修

ふだん展示向けに壁面等が設置されている地下1階展示室。今回はこれらを撤去しオリジナルの姿に。



【参考】20.《渋谷区立松濤美術館》中央吹き抜け 写真：◎村井修

計画当初のアプローチが第2部限定で復活！白井の当初案ではブリッジを渡り展示室に入る計画でした。ブリッジを渡るとき下には楕円形の泉、上には空が広がります。

このほか、建築ツアーでは館長室も特別公開予定。普段非公開の「茶室」も、第2部で特別に公開します

白井晟一が収集した家具・調度

白井にとって、インテリアは建築の最も重要な要素の一つでした。

各地の建築には、彼の目で選ばれた家具や調度類が収められています。今回の展覧会のために改めて開館当時の写真を探したところ、古い燭台を改造したスタンドライト、壁面に掛けられたタペストリー、古い石像などの品々が、

松濤美術館の空間を引き立てるように配置されていたことがわかりました。

今回は現存する松濤美術館の家具を可能な限り集め、さらに白井晟一自身が手元においた愛蔵品も加えて、空間と調度によるインスタレーションとして再構成します。



21. 燭台風スタンドライト



22. ガラス器（赤）



23. ガラス器（白）



24. 水差し



25. 香炉

すべて白井晟一研究所蔵

イベント

【第1部イベント】

1. シンポジウム「白井晟一とはどういう建築家だったのか」

登壇者：建畠哲（多摩美術大学学長）、布野修司（日本大学特任教授）、松山巖（作家・評論家）

司 会：白井 昱磨（白井晟一研究所）

日 時：2021年10月23日（土）14：00～16：00

2. 講演会「松濤美術館が建つまで ～白井晟一に師事して・建築プロジェクトこぼれ話～」

出 演：柿沼守利（建築家、柿沼守利研究室）

聞き手：平泉千枝、木原天彦（渋谷区立松濤美術館 学芸員）

日 時：2021年11月13日（土）14：00～15：30

3. トークセッション「21世紀、白井晟一建築について語る」

出 演：田根剛（Atelier Tsuyoshi Tane Architects）、白井原太（白井晟一建築研究所（アトリエNo.5））

聞き手：木原天彦（渋谷区立松濤美術館 学芸員）

日 時：2021年12月上旬 14：00～15：30 ※詳細な日程は決定次第当館HP等で告知いたします

1～3すべて 会場：B2 階ホール

*無料（要入館料） *定員各40名（申し込み先着順） *事前申し込みが必要です

【第2部イベント】

4. クロージングトーク：白井晟一建築について語ろう

出 演：羽藤広輔（信州大学工学部建築学科 准教授）

Zoom参加：川口佳子（長崎県美術館 学芸員）・井上康彦（アーツ前橋 学芸員）

聞 き 手：平泉千枝、木原天彦（渋谷区立松濤美術館 学芸員）

日 時：2022年1月22日（土）14：00～15：30

会 場：地下1階展示室

*無料（要入館料） *定員各40名（申し込み先着順） *事前申し込みが必要です

◆館内建築ツアー

白井晟一設計の美術館建築を職員がご案内します。

1月7日（金）、8日（土）、9日（日）、14日（金）、15日（土）、16日（日）

21日（金）、23日（日）、28日（金）、29日（土）、30日（日）

金曜日 11：00～、土・日曜日 16：00～（各約40分）

*無料（要入館料） *各回定員20名 *事前申し込みの必要はありません（土・日曜日は要入館予約）

【イベント事前申し込み】

往復はがき、または当館HPの日時指定予約サイトにて、〒・住所・氏名・日中連絡のつく電話番号、「参加希望のイベント名と番号」をご記入の上、松濤美術館イベント係まで。1通につき1名まで申し込み可能。（2021年10月15日10：00～よりお申し込み受付開始）。

※迷惑メール等の受信制限をされている方は、事前に@airrsv.net および@shoto-museum.jp ドメインより受信できるようにしてください。

※会期や開館時間、イベント等は変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ等でご確認ください。

開催概要

展覧会名 渋谷区立松濤美術館 開館40周年記念 白井晟一 入門
This is Sirai Seiichi

開館時間 午前10時～午後6時（入館は午後5時30分まで）
※本展会期中、毎週金曜日の夜間開館（～午後8時）は中止いたします
土日祝日・最終週は日時指定制

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、土・日曜日、祝日、
および最終週（第1部12月7～12日、第2部1月25～30日）は「日時指定制」を予定しております。
詳細は当館ホームページでお知らせいたします。お出かけの際は、最新の情報をご確認ください。

休館日 月曜日（ただし1月10日は開館）、11月4日（木）、
12月13日（月）～1月3日（月）、1月11日（火）

入館料 一般1,000円（800円）、大学生800円（640円）、
高校生・60歳以上500円（400円）、小中学生100円（80円）
※（ ）内は渋谷区民の入館料 ※土・日曜日、祝日は小中学生無料
※毎週金曜日は渋谷区民無料 ※障がい者及び付添の方1名は無料
※会期や開館時間、イベント等変更する場合があります。
最新情報は、当館ホームページ等でご確認ください。

リピーター割引

観覧日翌日以降の本展会期中、有料の入館券の半券と引き換えに、
通常料金から2割引きでご入館できます。

主催 渋谷区立松濤美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

協賛 ライオン、DNP 大日本印刷、損保ジャパン、日本テレビ放送網

助成 公益財団法人ポーラ美術振興財団

会場 渋谷区立松濤美術館 〒150-0046 東京都渋谷区松濤2-14-14
<https://shoto-museum.jp>

交通案内

● 京王井の頭線 神泉駅下車 徒歩5分 ● JR・東京メトロ・東急電鉄 渋谷駅下車 徒歩15分
※駐車場はございません。



次回展覧会のご案内

2022 松濤美術館公募展

2022年2月12日（土）～ 2月23日（水・祝）

サロン展「松濤クロニクル1981-2021」

2022年2月12日（土）～ 3月13日（日）

渋谷区立松濤美術館 開館40周年記念
白井晟一 入門

第1部 2021年10月23日（土）～12月12日（日）

第2部 2022年1月4日（火）～1月30日（日）

報道関係のお問い合わせ

広報担当：西・木原（pr-sma@shoto-museum.jp）

展覧会担当：平泉（hiraizumi@shoto-museum.jp）・木原（kihara@shoto-museum.jp）

TEL：03-3465-9421 FAX：03-3460-6366

- * 画像をご希望の場合は、作品名の前にある番号をお知らせください。チラシの画像もご使用いただけます。
- * 画像の使用は、本展のご紹介をいただける場合のみとしてください。
- * 画像のご利用後、データは破棄してください。
- * 基本情報確認のため、一度校正をお送りください。
- * 掲載後、見本誌をご送付くださいますようお願いいたします。